

## 人権を尊重する地域を支える大人として

子どもは「学校・家庭・地域」の中で育ちます。教師として、家族として、地域住民としての人権意識を定期的にふり返り、広野町の子どもたちが「違いや多様性」を受け入れながら「自分らしく」個性豊かに、明るく前向きに生活できるようにしましょう。



### 【大人のチェックリスト】 ※定期的に✓してみよう

	ふり 返 り 項 目	1回目	2回目	3回目
1	子どもを一人の対等な人間として大切にしていますか。			
2	子どもの意見と価値観を尊重するようにしていますか。			
3	子どもの言い分を頭から否定することなく、耳を傾けるようにしていますか。			
4	子どもが自分の考えを言ったり、自分で決定したりする機会を認めていますか。			
5	学力や運動能力等で子どもに優劣をつけることなく、一人一人のよさや努力した過程を見るようにしていますか。			
6	子どもが安心して、間違えたり、考えを変えたり、「分かりません」と言えるような雰囲気づくりに努めていますか。			
7	「男の子だから〇〇しなさい」「女の子だから〇〇してはいけない」と性別を理由に、言葉を発しないようにしていますか。			
8	いじめは人権侵害であることを理解し、いじめという行為はあってはならないことなのだと思える態度で接していますか。			
9	いかなる場合にも体罰はしてはいけないと、自分に言い聞かせていますか。			
10	「〇〇さんの家族って…よね」と子どもに聞こえる場所で、他人の悪口や否定的な言葉を話さないようにしていますか。			
11	子どもが間違えたことや失敗したことを、大勢の人がいる前で指摘しないように心がけていますか。			
12	人権教育の視点から、子どもの手本となるような言葉づかい、行動をとっていますか。			

〔参考資料：人権擁護のためのセルフチェックリスト（全国保育士会）〕

### このリーフレットを手にした皆さんへ

広野町で生活する全ての子どもたちが「自己肯定感」を高めながら、これからの社会を生き抜いて欲しいと願っています。ただし、この「自己肯定感」には「①条件付きの自己肯定感（I am very good）」と「②条件なしの自己肯定感（I am good enough）」の2種類があります。



- ①条件付きの自己肯定感…「周囲の人よりも優れているから」「先生に高く評価されるから」など人との比較によってもたらされる自己肯定感。
- ②条件なしの自己肯定感…「ダメなところもいいところも全部含めて自分が好き」という自己寛容ができて自己肯定感。

①の自己肯定感、少しでも条件が悪くなると激しく揺らぎ、「自己否定」と入れ替わり、とても不安定な状態になってしまいます。子どもたちには、②の自己肯定感「自分は自分であればいい。誰と比べるわけなく、ただ自分であることに価値がある」という気持ちをもって育ててほしいと思います。

東日本大震災から11年をむかえようとする現在、広野町では、住民の帰還や他自治体からの転居、避難先での学校運営、地元での学校再開等、様々な困難な状況に直面してきました。人権に関して、大震災に起因したいじめ、風評被害、正しい知識に基づいた放射線の知識不足による偏見等の課題が県内外で見られます。それに加え「新型コロナウイルス感染症」拡大における人権侵害等の問題も生じてきました。広野町では住民一人一人が互いを尊重し、他者と協働しながら、個性豊かに生活できる地域を目指していきたいと考えています。学校・家庭・地域それぞれの立場で、人権教育推進にご理解とご協力をいただきながら、リーフレットの積極的な活用をよろしくお願いいたします。

発行者：広野町教育委員会学校教育課（福島県双葉郡広野町大字下北迫字苗代替35 / 電話：0240-27-4166）

# つながり

～校種や業種を越えて 教科の枠を越えて  
学びがつながり続ける 広野町の教育～

学校・家庭・地域 みんなで人権教育を推進していくために

## 子どもの「自分らしさ」を奪わない 学校・家庭・地域であるために

### 「違いや多様性」を受け入れる

人は誰もがみんな同じではなく、多かれ少なかれその人によって「違い」や「特性」があります。



これらの「違い」や「特性」を「変だ!」と子どもを無理に矯正したり、当事者を社会や集団から排除したりすることはあってはならないことです。これからの時代、それぞれの「多様性」を尊重しながら、多くの課題に向き合っていく資質・能力が求められます。子どもに関わる大人自身が、子どもの「自分らしさ」を尊重できるような関わりを続けていく必要がありますね。

### こんな一言に気をつけてみませんか?

#### 事例1

男の子「ぼく、赤いランドセルが欲しいな…」  
大人「赤は女の子の色だから、黒や青にしなさい」  
(偏った※1ジェンダー規範により決められる)

#### 事例2

(転んでしまい泣いている男の子に対して)  
大人「男の子だから、めそめそ泣くんじゃない!」  
(性別を理由に泣かないようにと叱ってしまう)

#### 事例3

男の子「男がプリンス好きなんて気持ち悪い!」  
大人「そんなこと言わないの!」  
(子どもの発言を頭から否定してしまう)

### こんな対応にしてみてもはどうでしょう?

男の子って、女の子って「こうだよ」という既存のジェンダー規範は、子どもたち一人一人の「自分らしさ」を見つける妨げになり、子どもの自信を喪失させるきっかけを作ってしまう。

では、泣くことは女の子だけが許される行為なのでしょうか。辛い時、悲しい時に涙が出てしまうのは大人も子どもも同じです。子どもの思いに寄り添いながら、素直な気持ちを大切にしたいですね。

子どもの「偏ったジェンダー規範」をすぐに改めなくなる気持ちも分かります。でも、ここは「あなたはそう思うんだね」とまずは受け入れ、なぜそう思ったか聞いた上で、自分の考えを伝えてください。

※1「ジェンダー規範」…「男性と女性がどのようにあるべきで、どう行動し、どのような外見をすべきか」という慣習的な考えのこと。

## 東日本大震災から10年…「中学生からの“ありがとう”」



東日本大震災から10年を振り返り、中学生が自分の思いを表現しました。当時、多くの住民が困難さを感じる中において、子どもや住民の人権がどう守られ、どのように尊重されたのでしょうか。そして、その経験から、子どもたちは何を考え、今後どのように生きようと思っているのでしょうか。

(令和2年度広野町立広野中学校第3学年生徒の作品より)

### 「両親の努力 成長し理解」

10年前の3月11日のあの日。私は、幼稚園の年中で何が起きたか分かっていませんでした。時がたつにつれて震災・原発事故が起き、津波にのまれ逃げ遅れた人が亡くなっているということが分かりました。

私は当時、双葉町に住んでいて原発事故の影響で10年たつても帰れていません。小さかった自分は親のおかげで今も生きています。親戚のいる埼玉県、それから西郷村に避難し、現在は広野町に住んでいます。その間に両親の計り知れない努力と汗があるのだろうと中学生になり、感慨深く感じる事ができます。

あの日あの時、何も分からなかった私は、周りの人々のおかげで今生きています。その中でも一番感謝を伝えなければいけない存在は両親です。これからこの思いはずっと胸の中にしまって、恩返しをしたいと思っています。いつか双葉町の家に帰り、住みたいと思っています。

### 「支えられ得た安心」

もうあの日から10年たとうとする人々の感謝の思いを書きたいと思います。ぼくが4歳の時、いきなり地震が起き、目の前で道路が盛り上がりトンネルから水が流れて来ました。とても怖かったです。

その後、自分の家に帰り、父が帰ってくるのを待ちました。夜になり家族でいとこの家に行き、アパートなどを借りて住むことになりました。母と父は、家族のために食料を集めにいき、大変だったと思います。

お風呂にはあまり入れない、トイレも水が流れないため、とても大変でした。落ち着いてきた時には、人々の支援のおかげで学校へ行けました。とても感謝しています。

さまざまな地域の方からの支援金、自衛隊の方々からの支援があり、一日一日安心して過ごすことができました。皆さんの温かい支援、ありがとうございます。

### 「当たり前を振り返って」

震災から10年がたち今まで、たくさんの支援を受けました。千葉県に住んでいるおじの家にお世話になったり、いわきにいた時は小学校に入学する時に無償でランドセルを頂いたりしたことが強く印象に残っています。

自分が15歳になり、ここまで成長できたのも、支援して下さった方々のおかげです。そのことにも中学生になってから気が付きました。当たり前のように小学校を卒業でき、今、中学校卒業も目の前です。今までのことや、たくさん支援して下さった方々に感謝の気持ちを忘れずに、今後生活していきます。そして、自分も人から感謝されるような人間になりたいと思います。この先、長い長い人生の中で、たくさんの人に出会って行くと思います。この先出会う人も、今関わってくれている人ともお互いに絆を強め、困ったときは助け合っていけるような人間関係をつくっていきたくです。

## 両親・家族への感謝

### 「助けられた命大切に」

今年で震災から10年が経過しました。今でもあの時のことは鮮明に覚えています。

母が私を抱き締めながら泣いていたり、避難所にはたくさんの人が避難生活を送っていたりしました。そして、私が生きているのは、家族やたくさんの方々を支えられたからだだと思います。

前触れもなく、経験したことのないくらいの大地震が来て、何が起きているかさえも分からない状況の中で私の両親は私や姉を必死に守ってくれたり、母の実家にある白河市に避難したりと今考えれば両親の方がつらかったと思います。

そして、たくさんの方々から応援の声や支援物資を頂きました。何回感謝を言っても足りないくらい感謝しています。たくさんの方々から助けていただいたこの命を大切に、感謝を忘れずに生きていきたいです。もし災害が起こったら、私が助ける側になってたくさんの方々への心の支えとなって、恩返しをしていけたらいいなと思います。

### 「幸せを支えてくれる人」

私が改めて感謝を伝えたい相手は、両親です。震災当時、私は福島市の父の実家近くに住んでいました。祖父母の家によく行ったり、その土地の食べ物を食べたり、普通の生活を送っていたと思います。幸せな時間もあつという間に壊れるのだと、わずか5歳だった私でも感じました。

母は放射線についての情報を外国の記事から得たり、食料の産地にも気を配って食べさせてくれたりしました。父は高齢の祖父母の元にいた方がいいのか、それとも私と弟の健康な未来を守るため引っ越しの方がいいのか、母の訴えを冷静に考え、引っ越しを決めました。つらかったし、悔しかったと思います。でも、最終的に決めてくれた父と、全てを尽くして守ってくれた母には感謝の気持ちでいっぱいです。

あの日から10年経て思うこと。それは、幸せの裏には、必ず支えてくれる人がいるということです。

### 「多くの支援に思いはせ」

僕は、震災でたくさんの人に助けられました。3月11日に起こった大震災は僕が幼稚園にいた時でした。

それから10年経って僕は15歳になり受験生になりました。今でも震災の日は鮮明に覚えています。僕は千葉県に避難しました。そこで親戚の家にお世話になりました。親戚の方々には、とても感謝の気持ちでいっぱいです。

僕は今から約7年前に広野町に帰ってきました。その時に震災後の町のことを聞きました。地震の被害はもちろんですが、津波の被害がすごかったと聞きました。

ボランティアの方々や住民が避難させ、行方不明の人たちを捜してくれたということも聞きました。ボランティアの方々の協力がなければ、今の僕たちの生活はなかったと思います。本当に感謝しています。

### 「今も残る幸せな思い出」

いろいろな方々から人、物、心の支援を頂いていたこと、震災が起きたのがどれほど大変で苦しかったのかということ、当時の私には何も分かりませんでした。

しかし、震災で明確に残っている記憶が一つだけあります。それは避難所にいたお姉さんと一緒に追いかけてこをした思い出です。当時の私にとって幸せなひとときだったと思います。今思えば、そのお姉さんはボランティア活動をしていた方だったのかなと思返すことがあります。

今私たちがこうして普通に生活することができるのは、支援をして下さった方々やボランティア活動をして下さった方々が私たちのために頑張ってくれたおかげです。震災を経験したことを決して無駄にせず、今度は誰かの支えになれるようになりたいと考えています。

### 「今度は自分が助ける側に」

僕は震災で、いろいろな人に助けられました。震災で避難せざるを得ない状況でした。避難先の埼玉県三郷市では、不安と恐怖でいっぱいでしたが、大学生の方々と一緒に遊んでくださったり、元気づけてくれたりしたので、安心して過ごせました。

体育館は、暑くてプライバシーがなく劣悪な環境でしたが、ボランティアの皆さんや、周りの人々が温かく接してくださいました。震災という暗い状況下で、見ず知らずの人たちからも優しくしてもらいました。あれから10年がたった今、今度は僕たちが優しくする立場だと思います。

多くの人の助けがあったことによって、今の僕がいます。この経験を生かして、多くの人々を助けたいと思います。次にこのような震災があっても、過去から学んで未来に生かすように、過去に伝える大事なこととして語り継いでいきたいと思っています。



### 「支えがあって今がある」

10年前。私の通っていたいわき市の久之浜第一幼稚園は、波にのまれ、今では跡形もなくなってしまいました。地震発生時、私の身内には原子力発電所で働いていた人がいます。今生きていることが奇跡とも言えると思います。震災後、さまざまな否定的な声もありますが、そういう関係の仕事に携わって来ています。感謝しなければならぬと思います。

そして震災から数日がたった時、私は甲府に4ヶ月ほど避難をしました。甲府の幼稚園の方々には、温かく迎え入れて下さったこと、洋服や家電を支援して下さったこと、たくさんの感謝があります。

たくさんの助けがあったからこそ今があること。私たちは、これを次の世代に伝えていくべきです。過去のことからといって目を向けず忘れてはいけません。これから先、同じような災害が起こったとき、今度は私たちが誰かの支えでありたいです。

## これからはつらい立場の人を支えるために…

### 「これからにつなぐ」

あの日からもうすぐ10年を迎えます。あの頃、私たちは5歳。今年の3月12日に中学校を卒業します。あの頃には分かっていなかった当時のこと。成長するにつれて知っていく当時のこと。たくさんの方からの支援のおかげで今を生きていくことができます。本当にありがとうございます。

当時の日常を取り戻すには時間がかかります。震災10年目の去年から今年にかけては、新型コロナウイルスの流行により、いつもとは違う日常を強いられました。ただこれは福島だけでなく、世界の問題です。これから生きていく中で、いろいろな災害が起こるでしょう。

しかし、今度は私たちが一緒につらい立場の人を支えてあげる存在にならなければいけません。他人ごとではなく自分ごととして物事を捉え、日本中が一つとなってつらいことを乗り越えていきましょう。これまでのことをこれからにつないでいくこと。それが私たちの役目です。

差別や偏見なく、多くの大人に自分の悩みや不安、困り感等を受け止めてもらった経験は、子どもたちの成長に大きな影響を与えています。これからも「相手の立場や気持ちに寄り添え合える」地域であってほしいですね。

